

「デサエ」の融合化とその背景

山田 昌裕

1. はじめに

本稿では格助詞「デ」と副助詞「サエ」が一助詞として融合化したと見られる「デサエ」について考察する。

① 現在、日本では外国人を避ける旅館が少なくない。有名観光地でさえ、多言語での看板やパンフレットの設置、インフォメーションセンターの対応ができてるのは一部だ（「私の視点」外国人観光客 再訪誘う由布院を手本に」2012年05月23日朝日新聞朝刊p.15）

② 年末にかぎらず、ここはいつ訪れても数多くの人でにぎわっており、活気ある呼び込みが耳に心地よく響きます。ひっきりなしに通る電車の音でさえ、ここでは商店街の活気をさらに強調するBGMのように聞こえます。（「東京物語散歩」2012年05月16日朝日新聞朝刊p.28）

①の場合、「デサエ」から「サエ」を消去し、「有名観光地で～対応ができてるのは」としても日本語表現としては特に問題はない。つまり、場所を示す格助詞「デ」に「サエ」が下接した表現形式であり、接続した「デサエ」であると考えられる。しかし、②の場合、「デサエ」から「サエ」を消去し、「電車の音で～BGMのように聞こえます」とすると日本語表現と

してはおかしくなる。つまり、この場合の「デサエ」は「デ+サエ」という単なる助詞の接続「デサエ」ではなく、一つの助詞として融合化した表現形式であるということになる。

このような融合化した「デサエ」は②のようにガ格成分に下接する場合が多いのであるが（「デサエ」の代わりに格助詞を補うとすると「電車の音がBGMのように聞こえる」となる）、次の③のようにヲ格成分に下接する場合もある（「がんを治療しながら働く」）。

③ 「国民病」といわれるがんでさえ、抗がん剤などの発達により、治療しながら働き続けることができる時代になった。（「「殉職」する管理職たち 「自殺」・「病気」で死亡率が上昇」2012年05月14日アエラ p.15）

このような「デサエ」に関しては、市川（1989）、富阪（1998）、菊地（1999）、中西（2005）などにおいて、「サエ」との相違という観点からの研究はあるが、「デサエ」の発生という観点からの記述はない。そこで本稿では、「デサエ」がいつ頃からどのような過程を経て助詞として融合したのか、またその発生の要因について考えることにより「サエ」との違いについて明らかにしたい¹⁾。2節では「デサエ」の様相と融合化過程について、3節では「デサエ」発生の背景とそこから見えて

くる「サエ」との違いについて考察する。

2. 「デサエ」の様相と融合化過程

本節では、「デサエ」の発生が見られた江戸期以降、明治大正期までの様相を捉えた上で、助詞「デサエ」の融合化過程について考察したい。

2.1 「デサエ」の様相

『日本国語大辞典 第二版』によれば、格助詞「デ」は早く平安中期に見え、平安末期以降盛んに用いられたという。一方「サエ」は文献時代から存在する助詞である。したがって「デサエ」という接続は平安末期以降から見られてもよさそうであるが、実際には江戸期以降の資料にしか見られない。

- ④ 先にから門口に蚊に喰はれ。長々しい親達の愁嘆聞いて。涙をこぼしました。ム、そんなら皆聞いてかよう合點参りしか。他人でさへ目を泣きはらした。

「女殺油地獄」(近松浄瑠璃集上 p.418)

- ⑤ 生先の短い此老人でさへ、毎晩其様に遅く迄起きて居るのか。

石橋思案「睡眠の節減」『太陽』

④⑤は「サエ」を取り除いて「他人で目を泣きはらした」「此老人で毎晩其様に遅く迄起きて居るのか」は成り立たないので、この場合の「デサエ」は一助詞として融合し、ガ格成分に下接していると考えられる。

【表一】は「デ」と「サエ」が単なる接続として「デサエ」になっている場合と、一助詞として融合している「デサエ」に分けた表である。

【表一】	江戸期	明治大正期
連接	32(45.1%)	35(28.9%)
融合	39(54.9%)	86(71.1%)
合計	71(100.0%)	121(100.0%)

【表一】からは時代が下るにしたがって、「デサエ」の中で融合化している「デサエ」が増加していることがうかがえる。

【表二】は、融合化した「デサエ」がどのような格成分に下接しているのかを示したものである。

【表二】	江戸期	明治大正期
ガ格成分	33(84.6%)	80(93.2%)
ヲ格成分	4(10.3%)	2(2.3%)
カラ格成分		2(2.3%)
ニ格成分		1(1.1%)
その他	2(5.1%)	1(1.1%)
合計	39(100.0%)	86(100.0%)

【表二】からは「デサエ」が基本的にガ格成分に下接すること、また時代が下ると多様な格成分に下接するようになることがうかがえる。⑥はヲ格、⑦はカラ格、⑧はニ格に下接する例である²⁾。

- ⑥ 悪い子でさへ捨かねるは親の因果。ましてけなげな子でないか

「ひらかな盛衰記」(浄瑠璃集 p.137)

- ⑦ 僕は今はこんな寫眞からでさへ肖像をかゝされてゐるのだ

武者小路実篤「AとB」『太陽』

- ⑧ 自分のやうな鈍感な人間にでさへも……………といふやうな意味の文字を、彼はその日の日記のうちに書いた。

中村星湖「歌さんの幻影」『太陽』

2.2 「デサエ」の融合化過程

融合化した一助詞としての「デサエ」は、「名詞句+デ」に「サエ」が下接したところから来ていると考えるのが自然であ

ろう³⁾。しかし【表二】に示した通り、融合化した「デサエ」がガ格成分を中心に下接するのはなぜなのか、気になるところである。文中でのデ格名詞句の意味役割は、場所、期間、道具、手段、原料、原因、理由、様態などである。したがって「デサエ」が「名詞句+デ」に「サエ」が下接したもののならば、ガ格成分とは相容れないはずである。

間淵(2000)は⑨や⑩などの例をあげ、次のように述べる。

場所性が薄れて背景化され、元々は副次的な性格であった動作主性の方が強く感じられる例が、近世以降多く見られるようになる。

⑨ あれは裏の内で呼びにやつたのだ
『浮世床』p.321

⑩ 奉行所でいうには、「(中略)」とて取り上げぬ故、おおきにこまった

『夢酔独言』p.385 下
また、⑪などの例をあげ⁴⁾、様態性が薄れることで動作主性が高まるとも述べる。

⑪ 鉄平へ、此おれかひつ担た鉄炮は、自分ではじくべいとは思はぬ

『雑兵物語』上18ウ
このように動作主性が強い名詞句に下接する「デ」が発生すれば、「デサエ」とガ格成分との接点も確かに見えてくる。

しかし、間淵(2000)が提示するデータ「時代別用法分布」によれば、動作主に下接する「デ」は、江戸期4.1%(708例中29例)、明治大正期3.2%(735例中23例)であり、割合としてはかなり低い。一方、「デサエ」全体のうちガ格成分に下接する「デサエ」は江戸期46.5%(71例中33例)、明治大正期66.1%(121例中80例)

である。一助詞としての「デサエ」の発生が単純に「名詞句+デ」を「サエ」が取り立てるところから来ているとすれば、上記のような割合の差は見られないであろう。一助詞としての「デサエ」の発生過程を探るためには、なぜガ格成分に偏るのかが説明されなければならない。

山田(2012)によれば、平安期において格助詞非表示成分(格助詞による表示を受けない格成分)に下接する「サエ」のうち、91.4%(472例中431例)がガ格成分に下接している。また今回の調査によれば⁵⁾、江戸期においては格助詞非表示成分に下接する「サエ」のうち、71.5%(144例中103例)がガ格成分に下接している(⑫⑬)。江戸期には多少割合は減るものの、「サエ」はガ格成分との結びつきが強い助詞であると言える。つまり形式上、格の明示はされないが、格成分に下接する「サエ」の多くは「ガ格成分+サエ」であるということになる。

⑫ ^{うはべ}表面は平氣に見せ掛けても、心の^{うち}中は酒の酔^{あひ}さへ、けろりと醒めてさまざまと、計略^{もくろく}むからに酔うた振

『花の志満台』p.279

⑬ 只其の事のみ思ふものから、うつらうつらと床病の、朝な夕なの食事さへ、ろくろく進まず打臥しぬれど

『仮名文章娘節用』p.284

「サエ」はガ格成分に下接する性格が強い助詞であると考えられた。したがって「名詞句+デ」を取り立てる際に、「デ」の中でも動作主性の強い名詞句に下接している「デ」との接続がもっとも自然であったと思われる。「デ」全体から見れば、「デ」が動作主性の強い名詞句に下接する例は非常に少ないが、「サエ」はガ格

成分に付きやすいという性質を持つために、特に動作主を示す「デ」を中心に下接したと思われる。このような経緯を想定すれば、動作主に下接する「デ」の数値（江戸期4.1%、明治大正期3.2%）とガ格成分に下接する「デサエ」の数値（江戸期46.5%、明治大正期66.1%）との差違が理解されるであろう。

そして融合化した「デサエ」は「デ」には見られないガ格成分にも広く下接することになる。

- ⑭ 其の上に慎むべきは、^{りんき}恠氣嫉妬の惡念ぢやが、さて是れは一番慎み難く、堪へ忍び難いもので、昔から賢女と言はれる人でさへ、兎角其の一念は、去り難いやうに見えれば、まして一通りの人では、慎むこと愈々なり難いに由つて 『花の志満台』p.431
- ⑮ 神は此國を明かに照し給ふがお役。佛は後世を救ひ給ふがお役。その大切な神仏さまがたでさへ、金銀を御信心遊ばす。夫はなぜといふに——中略——しからば凡夫においては、金銀を信心し奉るが第一に近道さ。

『浮世風呂』p.259

⑭の「人」、⑮の「神仏さまがた」などは場所性や様態性が弱まった名詞句などではなく「人」そのものである。融合化し、一助詞と考えられる「デサエ」の上接語には、固有名詞や人称代名詞を始め、「親」「子ども」「女」「男」「女房」「渡し」「酒屋」「大名」「乞食」「他人」「人間」など、多くが人性名詞となっている。これはガ格成分と強く結びつくという「サエ」の性質の影響であり、またこのような「サエ」の性質がなければ「デサエ」が「デ」格の用法から離れることはなく、融合化

はなかったものと思われる。

「デサエ」の中には、⑩⑪などのような動作主以外のガ格成分に下接している例も見られる。このような成分に「デ」が下接することはない。これらの例はさらに「デサエ」の融合化が進んだことを示唆するであろう。

- ⑩ お柳「そんなら事は切れたのか。コリヤマアどふせう〜ぞいのふ。」ト死骸へ縫り泣く。三平「御尤でござります。何者の仕業か、下郎めでさへ口惜しうござります

「小袖曾我薊色縫」(歌舞伎脚本集 p.363)

- ⑪ 子故に迷ふは親の常、鳥獸でさへ其の様なるを、まいて人間はなほ更に子を見る事親に若かず

『仮名文章娘節用』p.276

以上のような「デサエ」の発生過程を考えれば、可能性としては平安期末から存在しえた「デサエ」がなぜ江戸期にならないと発生しなかったのかについても説明がつく。「デ」が動作主に下接するという性質を持たないうちは、ガ格成分と強い結びつきを持つ「サエ」は「デ」との交渉を持ちえなかった。「デ」が江戸期に入って動作主に下接するようになって初めて「サエ」が連接可能となったわけである⁶⁾。

3. 「デサエ」発生の背景

では、なぜ「デサエ」という融合形式が発生したのであろうか。本節では先行研究の妥当性について考察し、代案を提出したい。そしてそこから見えてくる「サエ」との相違点について述べる。

3.1 先行研究と実態

3.1.1 先行研究

現代日本語の「サエ」と「デサエ」の違いに関して菊地(1999)の論考がある。「サエ」と「デサエ」は、どちらを使ってもよい場合もあり、一方しか使えない場合もある」と述べ、以下のような例をあげる。

- ⑱ この力士は力がある。好調なときは横綱[サエ/デサエ]投げ飛ばす。
- ⑲ 彼女の顔には、涙[サエ/*デサエ]浮かんでいる。
- ⑳ 僕[*サエ/デサエ]疲れたのだから、君はどんなに疲れたことだろう。そして「サエ」と「デサエ」の違いについて以下のように述べる。

サエとデサエの使い分けの基本原理：《P対照ならサエ、N対照ならデサエ》が使われる。両方に解釈できる場合はサエ/デサエどちらも使える。

P対照とは述語句の対照、N対照とは名詞句の対照である。例えば⑲では、「涙以外の何か名詞句」が浮かんでいて、「涙さえ浮かんでいる」わけではなく、「悲しい表情をしていて〈述語句〉、涙さえ浮かんでいる」という内容なので、P対照の「サエ」が使って、N対照の「デサエ」は使うことができないというわけである。反対に、㉔では、「僕」と「君」という名詞の対照すなわちN対照であるためP対照の「サエ」が使えない。⑱では、「関脇」や「大関」を投げ飛ばし、「横綱さえ投げ飛ばす」というN対照の解釈も成り立ち、また「横綱を押しだし」たり、「横綱と互角に戦か」ったりというP対照の解釈も成り立つため、「サエ」でも「デサエ」でも使うこ

とができると説明する。

3.1.2 江戸期の実態

では、江戸期に融合化した「デサエ」と「サエ」の実例を見てみよう。

- ㉑ 脊恰好はすらりとして、故人米三を中年増に作つたといふ風だつたが、女でさへふるひ付くものをネ。ましてや男は尤な事さのう。

『浮世風呂』p.216

- ㉒ 神鳴「針とは。」醫師「ただいまお目にかけましょう。申しこれでごさる。」神鳴「それを何とする。」醫師「これを痛む所へ立てます。」神鳴「何とそのようなものを身内へ立てらるものか。」醫師「人間でさえ立てまするものを、お神鳴の立てさせられぬと申すは御卑怯にごさる。」

『鳴神』(狂言集・下p.154)

㉑は、「女」が「ふるひ付く」程であるから、「男」が「(ふるひ付くのは)尤な事」であるという文脈で、「女」と「男」とのN対照と考えられる。㉒も「人間」と「お神鳴」とのN対照である。

しかし、㉓㉔のように、N対照ともP対照とも判断のつかない例も散見する。

- ㉓ そなた計殺しはせぬ。此母も三途の供。そなたを俺が手にかけて。母も追付跡から行。覺悟はよいかと立派にも涙とゞめて立かゝり。コレ小浪。アレあれを聞きゃ。表に虚無僧の尺八。鶴の巢簀。鳥類でさへ子を思ふに科もない子を手にかけるは。

『假名手本忠臣蔵』(浄瑠璃集・上p.357)

- ㉔ 貸したといふても借らんといふても、互に耳にかけず、なんじやいふ

てゐるハと耳にかけんがよいハいのウと、相方をなだむれば、かしたる山子、いよやまこはらをたてゝ、ハテ、とほうもない事をいふ人じや。百両といふ金を、耳に掛けずに居るゝ物か。ソリヤまたなげに。さればいの。おれ己が隣よめの姫ハ、五十両の持参でさへ、常住、はなにかけて居る

『嘶本大系』p.264

②③は「鳥類」が「子を思う」一方、「母」は子を思わずに「科もない子を手にかける」という文脈であるが、「鳥類」と「母」とのN対照とも、「鳥類が子を思い」、「母が子どもを殺す」というP対照とも判断できる。②④も同様に、「百両」と「五十両」とのN対照とも、「百両を耳に掛ける」「五十両の持参を鼻に掛ける」というP対照とも考えられる。

以上のように、「デサエ」の中には明確なN対照も見られるが、N対照ともP対照とも截然と分けることができない例も含まれている。

では、「サエ」はどうであろうか。

②⑤ お龜も亦世に珍しき發明うまれの生にて、文讀み歌詠み手習ふ道は更なり、物裁ち縫針てわざの技藝に勝れ、琴三味線の調べさへ、いと美しく何にまれ、をなご女子の道に暗からず

『仮名文章娘節用』p.265

②⑥ あるほどの物識をよせて、御讀ませ候へども、さらにこれをあかすものなし。爰に小野篁と申者まかり出て、「無惡善（さがなくはよからん）」とよみた。其時、御門、逆鱗なさるゝは、「篁よりはるか物識さへ、え讀まぬ物を、此者讀み申たるは、さだめて、其篁がたてつらん」と

『きのふはけふの物語』（『江戸笑話集』p.84）

②⑦ 文盲成百性、「さて〜、むかしよりつみに見た事がなひ、耳にきくさへいやじやに、まして目に見る事うるさし。はやく捨給へ、其貧乏を」

『輕口露がはなし』（江戸笑話集p.288）

②⑧は、「文讀み、歌詠み、手習い」は「更なり」、「技芸」に勝り、「琴三味線の調べ」が「美しい」というP対照と考えられるが、②⑥⑦はそれぞれ「物識」と「此者（篁）」、「耳にきく」と「目に見る事」とのN対照となっていることは明らかである。「サエ」の中には、P対照とN対照の両例が見られるわけである。

また、「デサエ」同様、②⑧⑨のようにN対照ともP対照とも截然と分けることのできない例も見られる。

②⑧ 有時吉野の奥山を見しに、そこには花さへなくて、順の岑入より外に哀しる人影も見ざりき。

『好色一代女』p.375

②⑨ されば智者は不定世界と觀じ、哥人は飛鳥川と詠めて、明日の事さへ定められぬ世に、來年の事を案ずるは恵方棚の吊り置きぞかし

『好色萬金丹』（浮世草子集p.57）

②⑩は、「花」と「人影」のN対照なのか、「花がなく」と「人影も見えない」のP対照なのか、また②⑨は、「明日の事」と「來年の事」のN対照なのか、「明日の事が定められない」と「來年の事を案じる」のP対照なのか、いずれも截然と分けることができない。

現代日本語を対象とした菊地（1999）によれば、「デサエ」はN対照、「サエ」はP対照で用いるという使い分けが見られ

るということであった。しかし本節で見たように、江戸期の事例によれば、「デサエ」の中にはN対照だけではなくP対照と考えられる例が存在し、また「サエ」の中にもP対照だけではなくN対照の例が見られた。さらにはN対照、P対照を截然と分けることができない例も見られた。したがってN対照、P対照という観点からの使い分けは、少なくとも江戸期にあったとは考えられない。

3.2 代案及び「サエ」との相違点

では、「デサエ」の融合化はどのような言語運用上の利点を目指したことによって起こったのであろうか。

古代語における「サエ」の機能は「累加（～までも）」の意である。ところが室町期以降、「ダニ」の機能である「類推（～さえ）」を吸収し、江戸期の「サエ」は「累加」と「類推」の両義で使用されることとなる。ここでいう「類推」とは③⑩のように、最低限（あるいは最大限）のものを提示して、「まして」と類推させる用法である。

③⑩ けふだにいひがたし。ましてのちにはいかならん 『土佐日記』p.41

ところが、江戸期の「サエ」は「累加」と「類推」の両義を持ったことにより、どちらの用法なのか判断できない例が出てくる。

例えば、②⑤の「サエ」は、「文読み、歌詠み、手習い、物裁ち、縫針そして三味線の調べまでも」という「累加」の用法と判別でき、また⑦⑧の「サエ」は、「耳にきくのさえ嫌なのに、まして目に見る事はうるさし」という「類推」の用法と判別できるが、その一方で⑬のように「病でなにもできず、そして朝夕の食事までもできない」

という「累加」の用法とも、また「朝夕の食事さえできず、まして日常生活のこともできない」という「類推」の用法とも取れる「サエ」が散見する。

③⑩ 年頃仕ふ奉公人さへ、尻喰ひの何とやら、勇んで出て行く其の中に、お組は兎もあれ私には、深い馴染もないお前のお頼み

『春色江戸紫』p.97

③⑩ 「人のはなをり申まいか」といふ。
「牛さへなをし候ほどに、人のは、猶〜やすく候」と申ければ
『きのふはけふの物語』（『江戸笑話集』p.87）

③⑩は「（年の浅い奉公人をはじめとして）年頃仕ふ奉公人までも出て行く」という「累加」とも、「年頃仕ふ奉公人さえ出て行く（まして年の浅い奉公人はいうまでもない）」という「類推」とも考えることが可能である。③⑩も同様に、「（さまざまなものを治す上に）牛までも治す」という「累加」とも、「牛さえ治すのだから、（まして）人のは簡単に治せる」という「類推」とも考えられる。

③⑩③⑩③⑩のような「サエ」の場合には情報発信者と情報受信者との間に齟齬をきたす可能性が生じる。この状態は言語運用において不都合であろう。「累加」と「類推」との違いが形式的な違いで示された方が利便性がよい。

このような観点から「デサエ」を見てみると、いずれも「類推」として機能していると考えられる。⑥⑭⑰⑲などは「まして」と呼応しており「類推」であると言える。また「まして」がなくても比較対照するものが存在し、「類推」と判断される例もある。⑮は「神仏さまがたが〜（まし

て)凡夫は～」、⑩は「下郎めが～(まして)お柳は～」、⑫は「人間が～(まして)お神鳴の～」、⑭は「五十両の持参を～(まして)百両という金を～」となっており「類推」と判断される。さらに比較対照するものが明示されていなくても、含みとして比較対照するものが想定される例もある。④は「他人が目を泣きはらした。(まして息子のあなたは～)」、③は「鳥類が子と思うのに(まして人である私が)子を手にかけるとは」という文脈であり、やはり「類推」と考えられる。

このように「デサエ」の発生と拡大は、「サエ」が「累加」と「類推」の両用法を持った事による言語運用上の支障を取り除くためであったと考えられるのである。

「類推」用法は、そもそも「程度の低いもの」と「程度の高いもの」とを比較対照することにある。したがってN対照と相性がよい。この「類推」を明示するために「デサエ」は発生したわけであるからN対照と馴染みやすい。つまり「デサエ」のN対照は、「デサエ」が「類推」を明示するところから来る二次的な性質であると考えられる。菊地(1999)においても、「〈累加〉の用法では、デサエではなくサエしか使われない」との指摘があるが、これは「デサエ」が「類推」を明示化するために発生したということと通底する。

では、「累加」を明示したい場合はどのような方法があるであろうか。その場合には「マデ(モ)」を使用することによって「累加」を明示することが可能となると思われる。この点に関しては他日を期したい。

4. まとめ

本発表では、「デサエ」の融合化過程と発生の要因について素描した。まとめること以下の通りである。

- a 「デサエ」は江戸期以降に見られる。
- b 時代が下るとともに「デサエ」の融合化は進む。
- c ガ格名詞句に下接する場合はほとんどであるが、カラ格や二格への拡がりも見て取れる。
- d 「デサエ」の融合化が進んだのは、それによって「類推」を明示して「サへ」の曖昧性を排除するためであった。

注

1) 本稿では、奈良期から江戸期までの資料として国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースを用いた。

また江戸期の追加資料として、「嘶本大系」(東京堂出版)第9巻～第19巻と国立国語研究所で公開されている岡部嘉幸氏(千葉大学文学部)作成の「人情本コーパス」(『仮名文章娘節用』(人情本第7回)、『花の志満台』(人情本第18回)、『花暦封じ文』(人情本第12回)、『春色江戸紫』(人情本第18回)、『春色恋廻染分解』(人情本第10回)、『恋の若竹』(人情本第8回)、以上人情本刊行会編)を用いた。

明治大正期の資料としては『近代女性雑誌コーパス』CD-ROM(国立国語研究所)、雑誌『太陽』(国立国語研究所資料集15『太陽コーパス』博文館新社)を用いた。

2)【表二】の「その他」の例は以下の通り。

- ①其の時に、金が出たらば唯^{とほ}でさへ、
爪に火點す旦那殿『春色江戸紫』
p.105
- ②只^{ひよわ}でさへ脆弱い子が、それこそ驚風^{きやうふう}
の虫でも引出し『仮名文章娘節用』
p.446
- ③私はあれだけ申したのでさへ、悪い
と思つて居りますので「海賊村」『太陽』
- 3) 市川(1989)では、「デサエ」の出自を
「断定の助動詞「ダ」の連用形「デ」+「サ
エ」と考えるが、発生時期である江戸
期の用例にはそのような成り立ちを疑
わせる用例はない。
- 4) 間淵の用例引用文献は『日本古典文学
全集』(小学館)所収『浮世床』、『日本の
名著 勝海舟』(中央公論社)所収『夢
酔独言』、『雑兵物語研究と総索引』(武
蔵野書院)である。
- 5) 数値は「人情本コーパス」のみによっ
た。
- 6) ただし、このような「デサエ」の融合化
過程を考えると、逆に【表一】にお
ける連接の「デサエ」が、融合化した「デ
サエ」と同程度存在する点が気にかか
る。連接の「デサエ」は平安期からす
で見られる「ニテサエ」に由来するも
のであり、「動作主+デ」に「サエ」が下
接することによって新たに生じた融合
化の「デサエ」と出自を異にすると考
えたい。詳しくは別稿で述べたい。

【参考文献】

- 市川保子(1989)「「サエ」と「デサエ」—
その構文と意味—」『筑波大学留学生教
育センター日本語教育論集』4
- 菊地康人(1999)「サエとデサエ」『日本語

科学』6

富阪容子(1998)「デサエはとりたて詞
か」『Language and culture : the jour-
nal of the Institute for Language and
Culture』(甲南大学国際言語文化セン
ター)2

中西久実子(2005)「表読みの「でさえ」
が用いられる構文的ファクターをめ
ぐって」『無差』12、京都外国語大学日
本語学科

間淵洋子(2000)「格助詞「で」の意味拡
張に関する一考察」『国語学』51-1

山田昌裕(2012)「古典語に見られる〈名
詞句+副助詞〉の格」『青山語文』42、青
山学院大学

付記

投稿後、査読の先生方より有益なご指
摘を賜りました。記して感謝申し上げま
す。

(恵泉女学園大学)